

詩の本質

ーヤコブソン詩学の批判的検討を通してー

樋野廣臣（人間学コース）

（指導教員：堂園俊彦）

キーワード：詩、ロシア・フォルマリズム、ヤコブソン、詩的言語

序章

古くから詩には様々な形式が存在し、それらはみな「詩」として、形式の違いこそあれ、一括りにされてきた。筆者も実際に詩の創作を通じて、「詩とはなにか」、「詩と他の文学作品を分かつ特殊性はなにか」という問いを抱き続けてきた。というのも、個々人にとって詩の定義は異なる、というのが詩に対する我々の共通理解なのかもしれないが、そういったありがちな結論を下すのは些か早計であるように思えたからだ。そこで筆者は、ロシア・フォルマリズムが生み出した文学理論を手がかりに、この問いを取り上げた。ロシア・フォルマリズムは1910年代のロシアに生まれた文学運動であり、文学の特殊性を言語学以外の他の学問に依ることなく、客観的に把握しようとした。その中でも代表的な指導者であったロマン・ヤコブソンは、フォルマリズムが姿を消したあともその学問を継承・発展させ、後世の構造主義の発展に影響を及ぼした重要な人物である。ロシア・フォルマリズムが編み出した文学理論と、ヤコブソンの言語学と詩学、これらの研究と対立する立場の批判的検討を通して、「詩の本質」を考察した。

第一章 ロシア・フォルマリズム

「文学固有の要素とはなにか」「文学研究を他の諸学と分かつものはなにか」といった根源的な問いを発したロシア・フォルマリズムは、当時のロシア詩の傾向である「未来主義」にその根拠をもつ。作品がもつ意味ではなく音を重要視する彼らは「ザーウミ（意味を超えた）言語」という独自の概念を生み出す。それは「日常生活やあらゆる実用性とは無縁」であり「言葉そのものの表現」から生まれたものであった。

フォルマリズムを構成する二集団、その一つであるオボヤズの創立者ヴィクトル・シクロフスキーは、「ザーウミ言語」の擁護者かつ未来主義の信奉者として、未来主義の主張に言語学・学問的根拠を与えようとした。一方、もう一つの集団モスクワ言語学サークルは、ヤコブソンを筆頭に、その研究対象を現代語だけでなく方言や民間伝承、詩へと拡大していった。結成当時、フォルマリストにとって詩の言葉は、日常言語に対する方言のような、「見聞き知らぬ」言葉のようなものであった。

のであった。

フォルマリズムは二つの敵を想定していた。一方では、文学作品の批評を政治や生活慣習、心理学などの諸学問に頼っていた文学史家であり、また一方では、文学作品を哲学的・宗教的テーマの反映とし、恣意的にその価値を判断していた象徴主義批評であった。他の学問に頼ることなく、表現手段である言語そのものに立脚して客観的に文学の特殊性を語るために、フォルマリストは「詩的言語」という概念を生み出す。二重の要請を表明したこの概念を用いて、作品という具体的な事実のレベルにおいて、詩とそうでないものを区別する違いを把握しようとしたのである。

シクロフスキーは、未来主義の主張に根拠を与える際、ポテプニャーの文学理論を援用している。この理論の内容は象徴主義者の詩に好まれて用いられているが、シクロフスキーは、ポテプニャーの「言語の特性から文学理論を構築する」論の進め方を参考にした。また彼は、その理論の批判的検討を通して、詩において「意味」は付随的な要素であるとし、外的形式である音やリズムの重要性を主張した。

フォルマリストを支配していたのは、「詩人は匠である」という意識であった。彼らは、文芸学を真の学問にするために〈手法〉の解明を重視した。「何が」書かれているかではなく、「いかに」書かれているかということが問題となり、彼らは当時の文学作品を題材として、表現方法としての手法を様々な定義していく。また、フォルマリズムにおけるもう一つの特徴として、〈異化〉の重視が挙げられる。シクロフスキーによれば、芸術の目的は、物事を異化・非日常化することであり、我々の知覚を困難にさせ、日常の生をありありと実感させることなのである。異化とは手法によって起こる現象であり、そうして生まれた言葉こそ詩的言語なのであった。

第二章 ヤコブソンの詩学

ヤコブソンの学問的歷程は、大まかに三段階に分けることが出来る。ロシア・フォルマリズムの代表的論客としてのモスクワ言語学サークル時代。チェコへ移住後、プラハ言語学サークルでフォルマリズム期の理論を継承・発展させるチェコ構造主義時代。そして、第二次大戦のさなか移住したアメ

リカでのレヴィ＝ストロースとの交流による構造主義の発展がある。この章では、各段階におけるヤコブソン詩学の発展を、節ごとに論じている。

ロシア・フォルマリズム時代のヤコブソンは、「詩的言語においては、日常言語の場合と異なり、伝達の機能が最小限に弱められ、表現のみを志向する詩的機能が大きな役割を果たす」とした。そして、イタリア未来主義を批判して、詩的言語と混同されがちな情動言語によるものだとした。また、ロシア詩を代表する前衛詩人フレーブニコフの作品を主な題材として、単語のレベル、文節のレベルなどのように、範囲を段階分けして手法の種類を挙げていた。

詩における意味から音への傾斜という思想は以前から見られたが、ブラハ移住後では、詩の構成原理としての音の側面を正面から取り上げる。散文と対比して、詩の言葉は意味と音の両側面から成るものであるとし、音的構成を実現する形式を言葉に加えることを「客観的圧迫」、さらに異化を実現するために「主観的圧迫」を加えるとした。手法の原理を「主観的圧迫」という形で韻律論の体系に組み込んだのである。

アメリカ移住後では、詩学を言語学に属する領域として、言語の機能面から詩を捉えようとした。その結果が六機能図式である。これにより、詩的言語は言語の詩的機能が優位に働いている状態によって生まれ、それは詩だけでなく、日常言語においても見られることが論じられた。また、ヤコブソンは、言語は「選択」と「結合」という二つの異なる原理から成り、意識下における構造として我々を支配しているという事実を明らかにした。そして、その二つの原理が、二つの対立的な比喩である隠喩と換喩の原理に通じるものとして、フォルマリズム以来の異化の概念をこれに集約した。

第三章 ヤコブソン詩学の批判的検討

ロシア・フォルマリズムの理論を内在的に批判する有名な論者としてミハイル・バフチンがいる。この章では、彼が詩的言語に対して挙げた批判を二つ取り上げる。第一に、フォルマリストが定義する詩的言語の特性に基づけば、詩的言語には全く生産力、創造力が欠けているという批判。第二に、異化の概念には矛盾が含まれているという批判である。

バフチンの第一の主張は、フォルマリストの定義する詩的言語は、他の言語体系においてすでに作られているものをく異化>して自動化した状態から引き出すだけであり、日常言語に寄生しているだけの存在である詩的言語に創造性は存在しない、というものである。そして、フォルマリストの詩的言語偏重を批判し、日常言語の多様性を指摘する。しかしこの批判は妥当ではない。なぜなら、日常言語を前提として詩的言語を生み出す行為は創造的であると言えるし、手法を駆使する作業の裏には美的感覚を要すると考えるからである。このことは、後期ヤコブソンの研究からも窺い知ることができる。

バフチンの第二の主張によれば、象徴主義のような恣意的・印象主義的な価値判断を克服しようとしていたフォルマリストが定義したく異化>の目的である「我々の知覚の刷新」というのは、その理論の基礎に他でもない「感知する主観的意識」を前提にしてしまっている。さらにこの事実は、フォルマリストが嫌っていた受容理論との親和性をも証明している。バフチンによるこの批判はフォルマリストにとっては有効ではあったが、プラハ言語学サークル以降、ヤコブソンは、詩的言語が日常言語に立脚していることを認めている。また、この批判によって、異化の概念は一見相対的で普遍性を欠いた概念に思えるが、日常言語に立脚して詩的言語が構造を感知させるという本質の部分は変わらないため、バフチンの批判は言語の自律性を脅かすものではないと筆者は考える。

終章

ヤコブソンの詩学の発展史と、バフチンによる批判の検討を通して、詩の本質を巡る議論における、この段階での筆者の結論はなにか。筆者が思うに、詩の本質とは「意味と音の側面における表現を志向した結果生じるく音楽性>」である。すなわち、詩の言葉とは意味の側面と音の側面のどちらをも蔑ろにしないものであり、リズムやアクセント、語呂の良さなどによって生まれたく音楽性>こそが、詩の本質だと考える。異化の原理を用いて創造された「意外性」は、詩や文学を読む上での面白さなのだろう。

追記

今回の論文の主旨は言語学の観点から詩の本質、すなわち詩と他の文学作品を区別する特殊性を明らかにすることであった。しかし得られた結論は、詩の本質とは何かという問いに対する答として何かを欠いているように思われてならない。「詩とは何か」という問いに答えるためには、さらに詩の起源を探る必要があると考えている。この作業を通じて、言語学からの見地とは異なる詩の本質が明らかになると思われる。また、我々が詩に魅せられる本質的な根拠が明らかになるだろう。太古の部族たちの踊りや笑いの表現、そういった身体に刻まれた音の感覚こそが詩の起源であるように思えてならない。何故ならば、我々が使う言葉と身体感覚は切っても切り離せない関係にあると考えるからだ。依然として議論すべき点は残されているが、本論文の要旨は以上である。

主要参考文献

- ・ M.オクチュリエ『ロシア・フォルマリズム』、白水社、1996
- ・ R.ヤコブソン『一般言語学』みすず書房、1973
- ・ P.N.メドヴェージェフ『文芸学の形式的方法』ミハイル・バフチン全著作【第二巻】、1928